

フラフ燃料製造プラントを竣工

建設系混廃の大量処理が可能に

最終処分量と
CO₂排出削減へ

セキヤ

総合リサイクル業のセキヤ（新潟市、関屋雄一社長、☎025・375・5108）は、県央エコプラント第二工場（新潟県燕市）を竣工し、5月から稼働を開始した。新たに導入したフラフ燃料製造

プラントは、リョーシン（富山市）が設計・施工を手掛けた。建設系混合廃棄物の大量処理が可能で、1時間当たり最大10tの生産能力を持つ。リサイクル率80%以上を達成し、最終処分量とCO₂排出量の大幅削減につなげていく。

同プラントは、高い



工場外観とフラフ燃料ペール



破砕困難物にも対応する（A）
生産能力は最大10t/時（B）



処理能力と安心安全のメンテナンス性、異物への耐久性等においても世界的に定評のある機器を組み合わせたことで、従来リサイクルが難しいとされてきた混合廃棄物の高精度選別と高効率処理を実現した。

処理フローでは、最初に0次破砕として、ロープ・漁網・土木シートなどの破砕困難物にも対応する2軸せん断式破砕機にかけた後、泥や砂の混入に強い粗破砕機で1次破砕

を行う。廃棄物の粒度を200μ前後のサイズにそろえ、選別工程の精度を高める仕組みだ。この2台を使い分けることで、多種多様な廃棄物の受け入れが可能にしている。

続いて、振動ふるい機を通して細粒物を落とし、風力選別機でがれき・金属・ガラス・陶磁器くず・塩ビ管などの燃料に不向きな重量物と、廃プラスチックを中心とした紙くず・繊維くず・木くずなどの軽量物に分ける。

処理施設を保有している。新工場には、これらの施設で1次処理した廃棄物を集約する。長年培った選別・破砕等のノウハウを生かして、リサイクル率の一層の向上を図るとい

社や製紙会社の代替燃料として有効利用できるようなった。廃棄物処理の新しい選択肢として提案を進めていきたい。また、土間選別の省人化が可能となり業務効率の向上につながった。環境と経済の両面でメリットがある。今後、さらにリサイクルの付加価値を高め、カーボンニュートラルの実現に貢献していきたい」と話した。

同社県央エコプラントの佐野拓也所長は、今回のプラント導入について、「従来は埋め立てや焼却に回っていた廃棄物を、セメント会